

原 著

当院における分枝型膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) に対する治療方針

小林規俊^{1,3)}, 佐藤高光¹⁾, 渡邊誠太郎¹⁾, 細野邦広¹⁾,
窪田賢輔¹⁾, 谷口浩一²⁾, 松山隆生²⁾, 遠藤格²⁾,
徳久元彦^{2,3)}, 後藤歩^{1,3)}, 中島淳¹⁾, 前田慎¹⁾,
稲山嘉明⁴⁾, 市川靖史³⁾

¹⁾ 横浜市立大学医学部 分子消化管内科学

²⁾ 横浜市立大学医学部 消化器・腫瘍外科学

³⁾ 横浜市立大学附属病院 臨床腫瘍科

⁴⁾ 横浜市立大学附属病院 病理診断部

要 旨

【目的】分枝型膵管内乳頭粘液性腫瘍 (以下, 分枝型 IPMNs) の手術例, 経過観察例の検討を行った。

【対象・方法】当院における手術例 (n=41経過観察後切除を含む) と経過観察例 (n=249) を対象とした。手術例は, 術前の超音波内視鏡 (以下, EUS) 所見と術後の病理所見との対比を行い, 経過観察例では, IPMN 由来癌の発生と通常型膵管がんの発生に関して検討を行った。

【結果】切除例による検討から, 絶対的に切除が必要な high risk group (上皮内癌と浸潤癌) の術前診断において, EUS による嚢胞内の結節高10mm 以上 (正診率88.9%) と結節横径15mm 以上 (正診率91.7%) が極めて重要な所見であることが明らかとなった。また経過観察例のうち, IPMN 由来癌は1例のみ認められた。一方の通常型膵管がんは5例にみられた。このうち高齢 (75歳以上: n=3), 男性 (n=4), IPMN の手術の既往歴 (n=3) が通常型膵管がん合併の危険因子と考えられた。

【結語】分枝型 IPMN は EUS による, のう胞内の結節径が手術適応の重要な所見であると考えられた。また経過観察例では, IPMN 由来癌よりもむしろ通常型膵管がんの合併に注意を払うべきと考えられた。

Key words: 分枝型 IPMNs (branch duct intraductal papillary mucinous neoplasms of the pancreas), EUS (endoscopic ultrasonography), 結節 (mural nodule), 膵管癌 (pancreatic ductal carcinoma)